鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学・社会科学編 第6号 2023

仏教寺院における教化活動の特徴

―多宗派質問紙調査にみる年中行事と法話を中心に―

川又　俊則

要旨

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が全世界に拡大した結果，あらゆる宗教集団はそれ以前と異なる対応が必然となった．とくに教化活動ではその変化が顕著である．仏教における教化活動は，僧侶が檀信徒などに対して仏道へ教え導く活動全般を指す．本稿は，科学研究費助成事業「基盤研究（C）人口減少社会における仏教寺院の実態研究―多宗派のブロック調査」（20K00081）で行った質問紙調査の結果をもとに，年中行事・法要，法話・説教を考察した．

年中行事・法要は回答寺院の9割が開催し，檀信徒の一部が協力して運営し，他寺院僧侶も協力していた．参拝者数が多い行事・法要を「先祖供養」「宗祖関連」「祈祷，除災求福など」「三仏忌」「その他」に区分すると，「先祖供養」の実施割合は，他を圧倒していた．ただし，「宗祖関連」や「祈祷，除災求福など」が多い宗派系統もあった．法話・説教は回答寺院の8割強が実施し，「法事」「通夜や葬儀」の機会に約9割が行ない，「戒名」「生前の様子」の内容が中心だった．これらは曹洞宗の宗勢総合調査（2015年実施）結果などとも相応している．

対面と同時にオンラインを併用した行事・活動も定着しつつある．質問紙調査以外の現況も踏まえると，従来の対面型に加え，ICTを活用した方法を併用することで，檀信徒と同時に宗教集団外部の人びとへの発信が可能になった．新しい関係を広げている寺院もある．人口減少・葬儀や法事の縮小化が続く仏教寺院において，多面的な教化活動の展開は維持継続の可能性を見出すだろう．

キーワード　仏教寺院，教化活動，多宗派，年中行事，法話

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が全世界に拡大した結果，あらゆる宗教集団はそれ以前と異なる対応が必然となった．とくに教化活動は，その変化が顕著に見られる．本稿は，科学研究費助成事業「基盤研究（C）人口減少社会における仏教寺院の実態研究―多宗派のブロック調査」（20K00081）（以下，本科研と略記）で実施された質問紙調査で得られた資料にもとづく[1]．調査概要は次節で明示するが，本稿はそのうち教化活動に焦点をあてた考察を示す．

仏教における教化活動とは，僧侶が檀信徒などに対して仏道へ教え導く活動全般を指す．この活動は，様々な区分が可能だが，本稿では，「寺院で行われる年中行事・法要」および「僧侶による法話・説教」を中心に扱う．

筆者自身はこれまで，現代の仏教界において，教化団体による教化活動が決して活発なものと言えないことなど，檀信徒による教化団体の活動に注目した論考を発表してきた［川又 2019a］．今回の調査項目は，寺院・僧侶を対象にした調査でもあり，檀信徒の活動を詳細には扱っていない．本稿では檀信徒の教化団体の活動には触れない．

以下，檀信徒が最も多く集まる行事の特徴や，行事における檀信徒のかかわり方，他寺院の僧侶の協力，宗派系統の違いなどを分析し，寺院の教化活動の現状と今後の可能性を探りたい．考察は，質問紙調査の結果のみならず，筆者自身の現地調査等の知見も交え，ウィズコロナ時代の教化活動に言及する．

１．質問紙調査の概要

（１）調査実施

本稿の基礎資料となる質問紙調査の概略は以下の通りである[2)].

もともと本科研は，地域を限定した多宗派の仏教寺院を対象に質問紙調査を行なうことで，仏教界の現状把握と課題検証などを計画していた．伝統仏教教団は20世紀後半以降，それぞれの教団の現状把握を目標とする宗勢調査を行なってきたが，質問項目など統一されたものはなく，その結果は単純に比較できるものではない[3)]．共同研究が始まった2020年度に対象地域の選定（甲信越・東海・近畿地方）を行ない，調査票の質問項目を選定し，予備調査を踏まえて調査票の内容を決定した．鈴鹿大学･鈴鹿大学短期大学部研究倫理審査委員会での審査を経て（承認番号2021-002），2021年6～7月に，郵送法にて調査を実施した．調査票の依頼文書には，「人口減少社会において寺院の存続が危ぶまれていることを踏まえ，寺院の実態を明らかにし，寺院の存続と人びとの暮らしがどのように影響しあっているのかを調査するために実施」することを明記し，調査への同意の諾否を問うた．同意した場合でも，途中での中断が可能だと明記し，完了した調査票を分析した．

調査対象地域として選んだのは，全国に先駆けて寺院の兼務・無住化が加速している甲信越・東海・近畿地方である．これらの地域に立地する寺院について，多段階無作為抽出法によって3,000ヵ寺を選定した．そして，それらの調査対象寺院に対し，調査票を郵送した．

約2ヵ月の調査期間を経て572票を回収し（回収率19.1%），うち，38票の無効票（本調査に「同意しない」回答など）を除いて分析することとした．最終的な有効回答票数は534票だった（有効回答率93.4%）．回収した調査票の数は決して多くはなかったものの，地域（非過疎・過疎），宗派，男女割合などを他資料で確認したところ，調査回答寺院は，同地域の寺院群と大きな偏りがないことも確認できた．

（２）結果概略

調査票は，寺院情報に関する設問（宗派，寺院区分，所在地），寺院構成員に関する設問（回答者との続柄，在籍区分，性別，年齢，居住地，就業，学歴，寺院内役割），住職に関する設問（前住職との続柄，関心ある研修，運営上の課題，護持運営の課題他），寺院に関する設問（檀徒戸数・信徒数，檀信徒と寺院の地理的関係，葬儀回数，法事回数，年間収入額他）などで構成されている[4)]．

宗派を記入した回答寺院は498ヵ寺だった．宗派は回答の多い順に，真宗大谷派18.1%，曹洞宗17.9%，浄土真宗本願寺派16.7%，浄土宗11.2%，臨済宗9.4%，日蓮宗4.8%，真言宗智山派4.4%と続く．回答寺院（基数488ヵ寺）の区分は本務・正住寺院87.3%，兼務寺院11.7%である．また，各寺院の檀（門）徒数の中央値は76.5人だった．

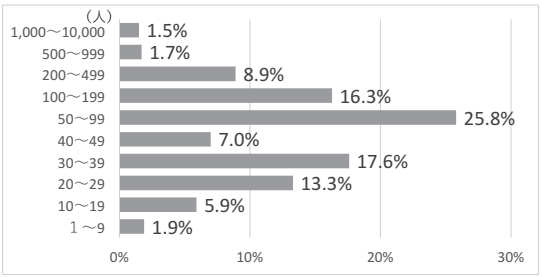
なお，本稿と同時期にこの調査の報告書が刊行される予定であり，調査全体の詳細はそちらを参照されたい[5)]．

２．年中行事と法要

（１）行事の開催と参拝者，協力者

まず，年中行事の開催，参拝者，協力者を見ていく．

年中行事・法要の開催は，「調査対象寺院では例年，年中行事や法要を開催していますか」という問いの回答に基づく．回答寺院（基数531ヵ寺．それぞれの設問で無回答は基数から除外しているため，設問により基数が異なる．以下同じ）のうち，開催していないは6.9%，開催しているは93.1%であり，開催割合は極めて高かった．



出所：質問紙調査結果をもとに筆者作成（以下同じ）

図１　参拝者数（1番目に多い行事）

その開催している行事に関して，「参拝者数が多い行事や法要の名称を，3番目まで回答欄に記入してください」と，行事や法要の名称は自由記述で記載してもらった．宗派ごとに行事・法要の名称が異なり，調査者側が設定した名称の選択肢では選びにくいことが推察されるため，回答者側の自由な記述を調査者側で分類することにしたのである．そして，「1番目に多い行事」については，参拝者数，参拝者に占める檀（門）信徒（以下，

檀信徒）の割合（%），檀信徒の行事への関与，他寺院の僧侶の協力，行事の特徴などを尋ねた．

すると，「1番目に多い行事」の参拝者数は50人未満が回答寺院の5割弱近くあり，参拝者数100人未満は約7割，200人未満は約9割だった（図1）．

これに対し，1,000人以上集まる行事も1.5%（7件）あった．具体的には，もみじ祭り，初詣（2件），盆会，開山忌，節分，除夜祭だった．盆会と開山忌は檀信徒中心だろうが，他の行事は，檀信徒以外が多数集まる行事だと思われる．

表1は，1番目に参拝者が多い行事における「参拝者に占める檀信徒の割合」である．檀信徒割合が4分の3以上ある回答寺院は6割以上を占めた．逆に檀信徒割合がゼロ（檀信徒がいない）は2.8%，檀信徒割合が10%以下という寺院は9%だった．参拝者が1番目に多い行事でも，その多くは檀信徒である寺院が大多数だとわかる結果だった．

表1　檀信徒の割合（1番目に多い行事）

檀信徒割合（%）	件数	割合（%）
0	13	2.8
1～10	29	6.2
11～24	21	4.5
25～49	46	9.9
50	26	5.6
51～75	40	8.6
76～99	116	24.9
100	175	37.6
合計	466	100.0

「1番目に多い行事」への檀信徒のかかわり方（図2）を見ると，「一部の檀信徒が協力する」が最も多く，全体の3分の2を占めていた．「多くの檀信徒が協力する」も2割弱あった．他方，「檀信徒は全く関与しない」も約15%あり，この場合，僧侶だけで行事を運営し，檀信徒は単なる参加者ということになる．参拝者数の多寡で比較したがとくに大きな違いは見られず，「一部の檀信徒が協力する」が多数だった．

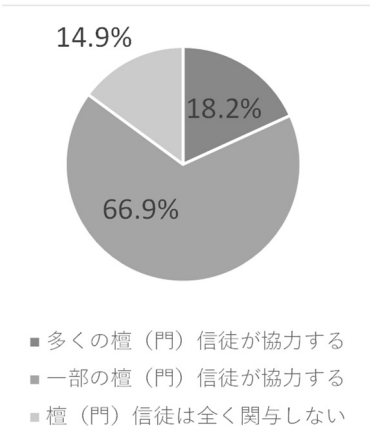


図2　檀信徒のかかわり方（1番目に多い行事）

図3は，行事に協力する他寺院の僧侶数を示したものである．ゼロ（協力僧侶なし）が37.3%で最も多いが，次は4～5人（17.1%），その次は6～9人（13.1%）であり，過半数は2人以上の協力を得ていた．回答寺院（基数476ヵ寺）の平均は3.61人，中央値は2人だったことを考えると，参拝者が多い行事は，当該寺院の僧侶1人で行えるものではなく，他寺院の協力に基づいて実施されてきたことがわかる．当然それは，互恵的な関係でもあり，僧侶同士で相互協力し合うのだろう．それは，葬儀・法事などの用僧（役僧，伴僧），あるいは恒例法要や臨時法要などの随喜などでも見られる．

なお，20人以上の僧侶が協力している行事は9件（1.9%）あった．個別に見ると，開山忌（45人），開山忌（30人），千部会（30人），大般若会（25人）などだった．

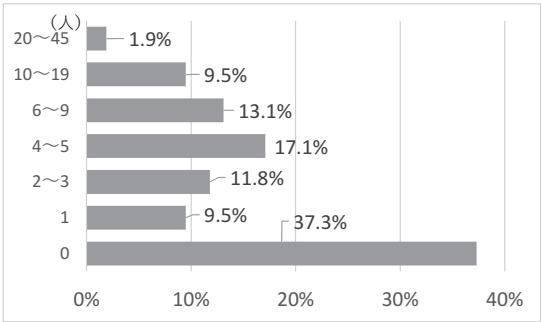


図3　行事に協力する他寺院の僧侶

（2）参拝者が多い行事の内容

先述の通り，自由に記述できる形式だったため，年中行事や法要の名称については，「彼岸」「彼岸会」「彼岸（春）」など，多様な表記であった．また，誤字・脱字も見られた．そこで，それら多様な表記であっても同一行事と見なせるものは集約し，筆者らが整理・分類して集計したところ，概ね，表2のようにまとめることができた．

施餓鬼，盂蘭盆会，彼岸会，永代経などを「先祖供養」とまとめた．続いて，報恩講（浄土真宗），御忌会（浄

表2　行事五区分と行事名称

行事五区分	行事名称
先祖供養	施餓鬼、施食
	盆、盂蘭盆会
	施餓鬼・お盆
	彼岸（春・秋）、彼岸会
	永代経
宗祖関連	報恩講
	御忌会
	御会式
	開山忌
祈祷、除災求福など	除夜会、除夜祭
	修正会
	正月、新年祝祷会、元旦会
	節分、節分会、追儺
	大般若、大般若会
	星まつり、星祭
三仏忌	涅槃会
	成道会
	降誕会、花祭り、花まつり
その他（諸仏への祈りなど）	観音講、観音祭、観音会
	地蔵盆
	お十夜

土宗），御会式（日蓮宗），開山忌（各宗派）などを「宗祖関連」とまとめた．次に，除夜会，修正会，正月，節分，大般若，星まつりは，いずれも「祈祷・除災求福」に関するものと考えて，合算した．さらに，涅槃会，花祭り・降誕会，成道会は「三仏忌」としてまとめた．そして，上記の区分に含むことができないものを「その他」とした．ここには，研修会，総会，あるいは観音講や地蔵盆，お十夜などが含まれている．これらを「行事五区分」として，考察することにした．

回答者の記述について，参拝者が1番目に多いもの，2番目に多いもの，3番目に多いものと区分しまとめたのが表3である．

表3　参拝者が多い行事五区分

行事五区分	1番目に多い		2番目に多い		3番目に多い	
	件数	割合（%）	件数	割合（%）	件数	割合（%）
先祖供養	224	41.9	248	46.4	138	25.8
宗祖関連	136	25.5	52	9.7	44	8.2
祈祷、除災求福など	65	12.2	49	9.2	57	10.7
三仏忌	6	1.1	9	1.7	18	3.4
その他	52	9.7	65	12.2	77	14.4
無回答	51	9.6	111	20.8	200	37.5
合計	534	100.0	534	100.0	534	100.0

1番目に参拝者が多い行事は，「先祖供養」が41.9%を占め，「宗祖関連」の25.5%やそれ以外と比べ圧倒的に多いことがわかる．2番目に参拝者が多い行事も「先祖供養」が46.4%で，他は10%に満たないことを考えると，際立って多いとわかる．3番目に参拝者が多いものも「先祖供養」が25.8%であり，2番目に多い「祈祷，除災求福など」の10.7%の2倍以上である．しかし，「無回答」は，2番目に多い20.8%，3番目に多い37.5%であり，かなりの割合を占めている．2番目以降で，参拝者が多いと見なせない行事があるとの判断が垣間見ることができる．

「三仏忌」は1番目に多いでも実数で6件に過ぎなかった．しかし，2番目で9件，3番目で18件と，参拝者が多い行事に位置づく寺院もあることがわかる．

続いて，宗派系統における位置づけも見ておきたい．『宗教年鑑』誌で分類している宗派系統を参照し，宗派の回答から，寺院群を「真言系，天台系，浄土系，禅系，日蓮系，その他」と区分した．1番目に参拝者の多い行事について，宗派系統別に「行事五区分」の実施割合を示したのが表4である．

表4　宗派系統別にみた行事五区分の実施割合

宗派系統別にみた行事五区分割合	先祖供養	宗祖関連	祈祷、除災求福など	三仏忌	その他	合計
真言系	22	1	14	0	12	49
	44.9%	2.0%	28.6%	0.0%	24.5%	100.0%
天台系	5	0	4	0	0	9
	55.6%	0.0%	44.4%	0.0%	0.0%	100.0%
浄土系	88	117	17	3	20	245
	35.9%	47.8%	6.9%	1.2%	8.2%	100.0%
禅系	78	4	19	2	14	117
	66.7%	3.4%	16.2%	1.7%	12.0%	100.0%
日蓮系	17	2	5	1	2	27
	63.0%	7.4%	18.5%	3.7%	7.4%	100.0%
その他	1	0	0	0	1	2
	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	100.0%
合計	211	124	59	6	49	449
	47.0%	27.6%	13.1%	1.3%	10.9%	100.0%

＊件数の少ない「その他」を除き、全体割合より10ポイント以上高い割合に網掛け

これによると，1番目に参拝者が多い行事について，宗派系統によって差異があることがわかる．禅系や日蓮系は同様の傾向で，「先祖供養」が他宗派より参拝者が多い．同様に，浄土系は「宗祖関連」の参拝者が多い．また，真言系や天台系は「祈祷，除災求福など」で多い．真言系は「その他」も多かった．参拝者が1番多いということは，回答寺院が最も力を入れている年中行事であると言えよう．その割合が，宗派系統ごとに大きく異なっているということは，年中行事の重みが宗派系統によって特徴づけられるということだろう．

いま確認したのは，あくまでも「行事五区分」における多寡であり，具体的な年中行事・法要の名称ではない．そこで，次に，1～3番目に参拝者が多い年中行事・法要の具体的名称について，単語頻度を示す「ワードクラウド」を作成した（Exploratory（https://ja.exploratory.io/）[6]．それが図4である．その頻出度により単語の大

きさが1〜3番目で異なって示される図4を見れば，違いは一目瞭然である．その内訳の一部（上位20件以内）は表5で個別の件数を示した．

このワードクラウド3 つを比べると，共通点として，

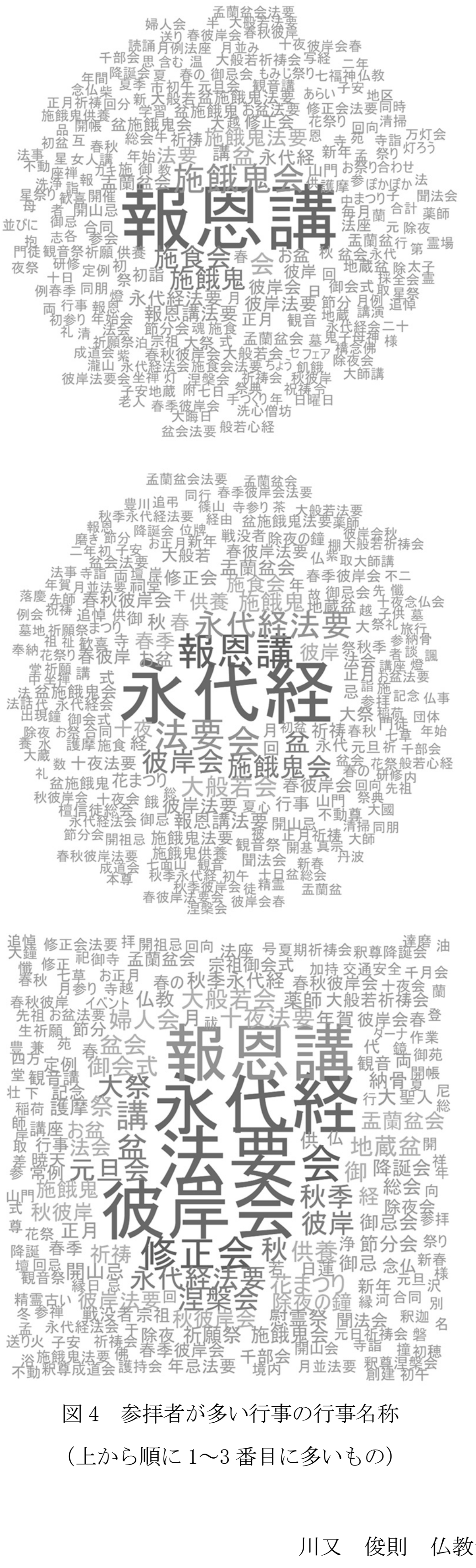


図4　参拝者が多い行事の行事名称

（上から順に1〜3番目に多いもの）

「宗祖関連」の報恩講は1〜3番目いずれでも参拝者が多かったことはすぐわかる．永代経，彼岸会など「先祖供養」行事も多数見られたが，施餓鬼会，施食会，盂蘭盆会など，同じ時期の年中行事であっても表現が多様だったため，単語としては件数が分散する結果となった．2，3番目に多い行事は，修正会，大般若会など「祈祷，除災求福など」の行事も見られる．

相違点として，2 番目に多い行事として十夜法要が，3番目に多い行事として「三仏忌」の涅槃会，花まつりや「その他」に含めている婦人会，地蔵盆などが見られることも確認しておきたい．

なお，2番目や3番目で，行事名を無回答としていた寺院もある．それらの寺院の属性を確認した．すると，「兼務」，「甲信越」，「禅系」，「過疎」において多いという傾向が見られた．逆に「浄土系」は無回答が少なかった．つまり，2・3 番目の回答は浄土系の行事が多く見られるということは注記しておきたい．

表5　参拝者が多い行事（上位20件以内）

順位	1番目に多い行事	件数	2番目に多い行事	件数	3番目に多い行事	件数
1	報恩講	111	永代経	66	法要	25
2	施餓鬼会	37	報恩講	29	永代経	24
3	施食会	25	法要	26	彼岸会	23
4	施餓鬼	24	会	25	報恩講	22
5	会	23	永代経法要	21	会	13
6	盆	19	彼岸会	16	修正会	11
7	法要	16	盆	15	講	9
8	施餓鬼法要	16	施餓鬼会	15	盆	8
9	永代経	11	大般若会	13	彼岸	6
10	永代経法要	11	施餓鬼	11	大祭	6
11	報恩講法要	11	春	10	秋	6
12	講	10	彼岸	9	永代経法要	6
13	彼岸法要	10	春季	9	元旦会	6
14	彼岸会	9	施食会	8	涅槃会	6
15	お盆	8	十夜	8	秋季	6
16	盂蘭盆会	8	供養	8	花まつり、御会式、婦人会など10件	5
17	彼岸	7	彼岸法要、お盆など5件	7		
18	修正会	7				
19	9件	6				
20						
総件数		483		424		335
未回答		47		108		197

（3）もっとも重視するもの

1番目に参拝者が多い行事の特徴を尋ね，複数回答を得た．その後，「もっとも重視するもの」も問うた．図5の通りの結果だった．「故人・先祖の供養」が56.7%と最も多く,続いて「諸仏諸祖に対する報恩」47.1%,「教

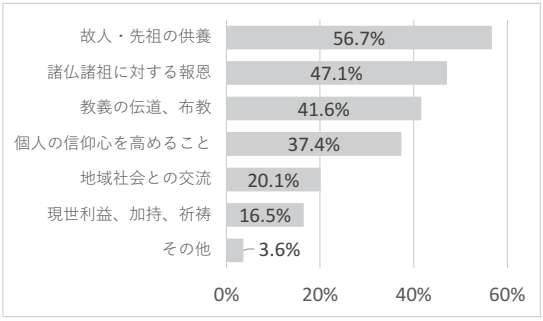


図5　1番目に参拝者が多い行事の特徴

義の伝道，布教」41.6%，「個人の信仰心を高めること」37.4%となっている．

表6　求めている役割

檀（門）信徒が調査対象寺院に求めていると考えられる役割（基数＝432）	割合（%）
通夜・葬儀・法事の執行	68.5
信仰のよりどころ	17.4
墓地の維持・管理	3.0
仏事の相談	3.0
現世利益、加持、祈祷	2.1
地域交流の場	1.6
その他	2.1
ない	0.2
わからない	2.1

「調査対象寺院の檀信徒は，調査対象寺院にどのような役割を求めていると考えますか」という設問で，選択肢を6つ用意し，それ以外に「その他」「ない」「わからない」「檀信徒はいない」から1つだけ選択する形で質問した．その結果は表 6 のとおりである．これによれば，寺院に求めている「と考えられる」役割は，死者儀礼関係（通夜・葬儀・法事の執行）が圧倒的多数だった（68.5%）．これに対応して「先祖供養」の年中行事を重視し，参拝者も多数である．「信仰のよりどころ」も約2割弱であった．

3．法話と説教

（1）機会と内容

「あなたは調査対象寺院で法話や説教を行なっていますか」と，法話や説教の実施について尋ねた．回答寺院（基数518ヵ寺）で「行なっている」ところは84.9%，「行なっていない」ところは15.1%だった．大多数が実

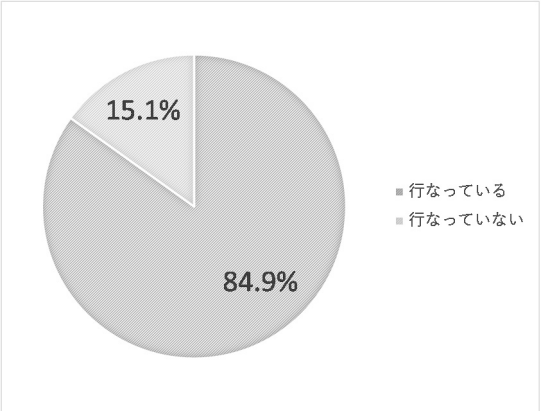


図6　法話・説教の実施

施していたことがわかる．その機会は，回答寺院（基数438ヵ寺）において，「法事」（89.7%）と「通夜や葬儀」（86.5%）が約9割と大多数だった（図7）．

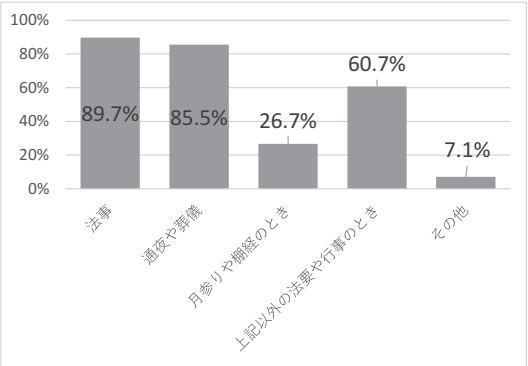


図7　法話・説教の機会

さらに，法話で重視する内容についてその他を含む7つの選択肢から3つまで選択してもらう設問にした．図8はその上位4項目を示しているが，「故人の戒名の意味」が62.3%，「故人の生前の様子・生きざま」が52.9%と過半数を占めた．

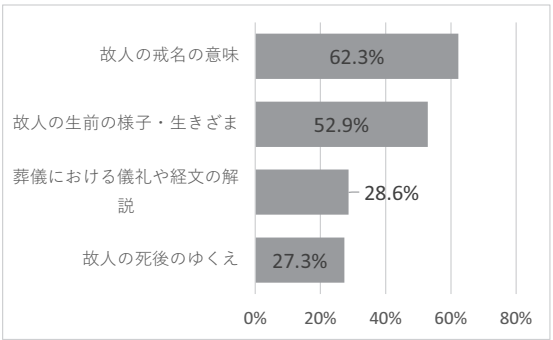


図8　法話で重視する内容

（2）お盆・お彼岸のお参り，月参り

「調査対象寺院では，月参り（月命日・月忌）やお盆やお彼岸のお参り（棚経）を行なっていますか」という設問の結果を図9に示した．「お盆・お彼岸のお参り（棚経）」は，大部分の実施が，回答寺院の過半数を占め，一部実施を含めると，9割近くが実施していた．「月参り（月命日・月忌）」は，大部分と一部の実施について合算すると過半数に達していた．ただし，「行なっていない」も4割強見られた．

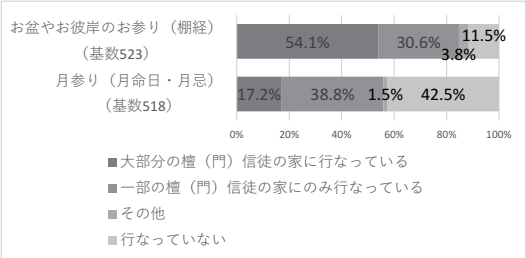


図9　お参りの実施状況

4．考察

（1）年中行事・法要

回答寺院の年中行事・法要の開催率は9割だった．

参拝者は1番多い行事であっても50人未満が半数近くであり，大半は檀信徒であることから，檀信徒のための年中行事が中心だとわかる．その行事は一部の檀信徒が協力して運営されている．ただ，1,000人以上の参詣者もいる行事は，一般の人びと向けだと思われる．

福岡県の高野山真言宗南蔵院は，かつて祈祷寺院として信者を集めていたが，現在の住職が1989（平成元）年に就任後，納骨堂と寝釈迦像を建立し，霊園も築いて死者儀礼を重視し，多くの檀家（住職は「お客さんと表現」[7]）を獲得した．高齢女性も祈祷の行事に多く参拝に来る．同寺院は年中行事を20近くも実施し，県内にとどまらず，東南アジア出身者を含め，多くのリピーターを集め，年間130万人が参拝する福岡有数の観光地として知られている．このように，檀信徒だけでなく観光客を呼び寄せることができる寺院を運営しているところは，継続が大いに可能であろう．

年中行事・法要に協力する僧侶はゼロも多いが（約4割），中央値は2人であり，過半数は2人以上の協力を得て行なっていた．寺院間の協力関係が，従来の寺院のそれぞれの年中行事・法要の維持に必要だと言えよう（新型コロナウイルス感染症による影響は後述）．

行事を五つに区分してみると，1番目に参拝者が多い行事は「先祖供養」だった．続いて「宗祖関連」「祈祷，除災求福など」だった．2番目，3番目も「先祖供養」が他より多く，寺院の年中行事は「先祖供養」中心だと思われる．それは「寺院が求められる役割」として死者儀礼関連が圧倒的に多いということ，「行事の特徴としてもっとも重視するもの」として「故人・先祖の供養」が最も多いことに，相応している．ただ，宗派系統によっては「宗祖関連」が多いところ，「祈祷，除災求福など」が多いところもあり，宗派系統による差異も見られた．

（2）法話・説教

回答寺院において8割強が法話，説教を実施していた．その機会は「法事」と「通夜や葬儀」が約9割と大多数だった．2015年に実施した曹洞宗宗勢総合調査でも，「どのような機会に，法話や説教を行なっていますか」という設問に対する複数回答の結果，高い割合の順に，「通夜や葬儀」87.2%，「年回法要（法事）などの追善供養」83.2%，「施食会などの恒例法要」56.1%，「法話会・坐禅会・梅花講などの布教教化を目的とした催し」36.0%，「その他」15.3%という結果だった（曹洞宗宗勢総合調査委員会［2018］）．「先祖供養」行事が寺院における中心的行事だとわかる．そして，それは多宗派を対象とした本調査でも同様の結果だった．

法話の中で重視する内容は「戒名」「生前の様子」だった．これも，曹洞宗宗勢総合調査の設問「あなたが重点をおいている内容は何ですか」の複数回答の結果，「故人の戒名の意味」70.8%，「死の受け止め方や今後の生き方」67.2%，「仏教や曹洞宗の教え」66.0%，「故人の生前の様子・生きざま」59.3%，「葬儀における儀礼や経文の解説」49.4%，「故人の死後のゆくえ」23.1%に相応している（曹洞宗宗勢総合調査委員会［2018］）．

地理学者の中條暁仁は，中国地方の日蓮宗寺院を調査し，「檀家の減少」から「寺院の無居住化」「無住職化」と進み，「廃寺化」へ向かうような寺院も過疎地域に見られることを論じた[8]．このように活動が停滞しているような寺院は，法話・説教などを実践する寺院とは程遠いだろう．寺院の存続には，そもそも僧侶の継承がス

ムーズに実行されることが前提とされる．しかし，すべてがうまくいくわけではなく，他寺院の僧侶に兼務を依頼することや，無住職の状態や檀家自体がいない寺院もある．江戸時代におけるそのような実態（兼務，無住，無檀家）に関する資料に基づいた考察もあるが，今後の参考に値するだろう[9]．平成から令和にかけての現代，その危機は常に潜んでいるだろう[10]．

（3）コロナ禍

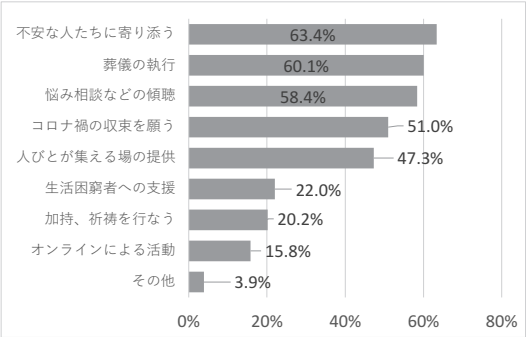


図10　僧侶が担うべき役割

僧侶が担うべき役割についても尋ねた．「不安な人たちに寄り添う」63.4%，「悩み相談などの傾聴」58.4%など，宗教者的な寄り添いにもとづく内容の回答が多く見られた．また，「葬儀の執行」60.1%，「コロナ禍の収束を願う」50.1%など，僧侶としての役割も過半数を占めている．

筆者は，新型コロナウイルス感染症拡大における危機的状況、いわゆるコロナ禍の現状のなか，寺院（やキリスト教会）の活動の様子を全国各地で観察してきた[11]．宗教系新聞・雑誌などでも色々な取り組みが，随時紹介されている．2020年時点，あらゆる宗教集団の大多数の行事は中止・延期となった．その後，オンラインでの動画などの配信サービスも模索され，実践する寺院・教会などが出現した．さらに，様々な工夫が凝らされ，一部の活動ではオンラインが常態化するものも出現した．その後，2021年以降，対応するワクチン接種が浸透し始めると，三密回避やマスク・消毒の徹底などの条件のもと，短時間での行事・活動が再開されるようになった．

2022年秋現在，対面での行事・活動もある程度の範囲で再開されている．だが，高齢や基礎疾患を持っているが故に外出が心配な人びとなど，寺院へ出向くことが困難な人も一定数いる．その意味で，従来の対面型の教化活動にとどまらず，同時にオンラインを併用した行事・活動も定着しつつある．例えば，（とくに若手）僧侶たちが，寺院行事を告知したり，自らの活動や作務を紹介したり，寺院内で咲く草花，あるいはネコなど小動物などの写真などが，SNSで投稿されたり，インターネットラジオやYou tubeなどを通じた法話など，多数が発信されている[12]．このような外部への発信は必ずしも檀家や信者に向けたものとは限らない．むしろ，世間一般に向けた対応が可能になったと言えよう．しかし，それによって寺院に足を運ぶことになり，やがて，新しい檀信徒としてその寺院とつながっていく様子も見られる．

おわりに

本稿の執筆を終える前に，今を支える世代から，次世代を担う人びとへの継承の対応がどの程度なされているのかが問われていることを改めて思う．ICTを活用した様々な教化活動が一部で展開されているが，僧侶側の得手不得手，檀信徒側の得手不得手もある．しかし，その流れは不可逆的な変化であり，もう，コロナ前には戻れない．

そう考えると，今回の質問紙調査は，従来の檀信徒中心の教化活動の「最後の実態」を確認したことになるかもしれない．

註

1）本稿は，日本宗教学会第81回学術大会（於：愛知学院大学）でのパネル「人口減少社会における甲信越・東海・近畿地方の多宗派寺院調査」（2022年9月10日）における，筆者の口頭発表「寺院の年中行事と教化活動の特徴」を基礎にしている．同発表およびパネル概要は，2023年1月以降，同学会の学術大会特集（『宗教研究』別冊）に掲載される（学会ウェブサイトはhttps://jpars.org/journal/bulletin/）．

2）質問紙調査の詳細は，脚註1）記載の学術大会パネルの要旨（相澤秀生）および，脚註5）を参照されたい．本稿では相澤記載の学会大会パネル要旨を踏まえ，概略を示している．

3）［相澤2019］は曹洞宗，浄土真宗本願寺派，真宗大

谷派，浄土宗，日蓮宗の5宗派について，寺院分布，立地，過疎地に位置する寺院の比較とともに，曹洞宗と浄土宗の調査から，檀徒戸数と法人収入を比較分析した．各宗派の比較を試みた一つである．本稿では各宗派の宗勢調査のうち，自らも執筆した［曹洞宗宗勢総合調査委員会編 2018］を主に参照した．

4）質問紙調査の分析である以上，本来，資料として質問項目・選択肢など調査票の内容をすべて明示すべきだが，紙幅の制限もあり，参照で示した本調査の報告書（脚註 5 参照）にはそれが掲載される予定でもあることから，本稿では必要な個所の明示にとどめることを述べておく．

5）「人口減少社会における仏教寺院の実態研究―多宗派のブロック調査」の研究経過・報告は（https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-20K00081/）を参照されたい．

6）ワードクラウドは次のように作業をした．まず，自由記述データをソフトに読み込ませた．テキストデータを単語のカウントする分析にした．辞書機能を用いて，単語をつなぐ設定をした．

7）南蔵院に関して、護摩供養参拝者への聞き取りにより高齢女性の信仰を考察した［後藤 2009］，地域社会と寺院，巡礼などを考察した［鈴木 2014］など多様な観点での研究がいくつもある．

8）本稿では，過疎地域の寺院の事例研究として［中條 2021］を参照した．

9）江戸幕府は本末制度により寺院を統制していたが，同時代の黄檗派（現黄檗宗）に関して，兼務寺院，無住寺院，さらに無檀家寺院の実態を『天保の末寺帳』『無住寺院帳』をもとに示す研究もある［竹貫 2020］．これによれば，兼務や無住寺院は，決して現代だけの課題ではなく，寺院の維持継続は古くて新しい課題であることが確認できる．

10）廃寺の事例研究として［坂見 2016］を参照．

11）いくつかの媒体で，それを紹介している（川又［2019b,2022］）．

12）［川又 2021］などで紹介した．

謝辞

本稿は，科学研究費助成事業「基盤研究（C）人口減少社会における仏教寺院の実態研究―多宗派のブロック調査」20K00081 の研究助成による．質問紙調査は，鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部研究倫理審査委員会の審査を受け，承認された（承認番号 2021-002）．

文献

相澤秀生（2019）：宗派間比較からみた過疎地寺院，相澤秀生・川又俊則編，岐路に立つ仏教寺院―曹洞宗宗勢総合調査2015年を中心に―，法蔵館，23-44

後藤晴子（2009）：生活実践としての仏教―高齢女性と寺院の親密性に関する一考察―，宗教研究，83（1），115-138

川又俊則（2019a）：教化活動の現状と課題―教化団体と住職の活動を中心に―，相澤秀生・川又俊則編，岐路に立つ仏教寺院―曹洞宗宗勢総合調査2015年を中心に―，法蔵館，167-197

川又俊則（2019b）：伝統宗教の「次世代教化システム」―教育界との比較と事例検討―，東洋学研究，56，283-295.

川又俊則（2021）：ウィズコロナの中の教化―オン・オフライン併用の時代を迎えて―，智山ジャーナル，95，35-43

川又俊則（2022）：仏教教団が実践する教化活動の脆弱性と強靭性―宗勢調査の比較考察―，東洋学研究，59，267-281.

中條曉仁（2021）：中国山地における寺院の無居住化と寺族の動向―広島県備北地域を事例として―，静岡大学教育学部報告（人文・社会・自然科学篇），72，1-14.

坂見英見（2016）：廃寺―寺院・門信徒の決断―，櫻井義秀・川又俊則編，人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視点から―，法藏館，311-331.

曹洞宗宗勢総合調査委員会編（2018）：曹洞宗宗勢総合調査報告書2015（平成），曹洞宗宗務庁

鈴木正崇（2014）：仏教寺院の近代化と地域社会―福岡県篠栗町の事例から―，社会学研究科紀要（慶應義塾大学大学院），77，177-211.

竹貫元勝（2020）：隠元と黄檗宗の歴史，法蔵館

こども教育学部　t-kawamata@suzuka.ac.jp

Indoctrination Activities in Buddhist Temples: A Multi-Denominational Questionnaire Survey on Annual Events and Dharma Talks

Toshinori KAWAMATA

Abstract

In the present day of the Covid-19 pandemic, all religious groups are tasked with how to best respond to the needs of their parishioners. This paper examines the results generated from questionnaire surveys given during annual events and Buddhist services held at temples in addition to Buddhist talks and sermons by monks. Buddhist indoctrination activities refer to all activities in which monks teach and guide their parishioners toward Buddhism. Annual events and memorial services were held in 90% of the respondent temples. With some parishioners and monks from other temples helping to organize these events, most events were related to ancestor memorial services. However, some sects laid emphasis on ancestor-related events as well as prayers for disaster prevention then did others. More than 80% of the respondent temples held Dharma talks and sermons, and about 90% of them were held during memorial services, specifically, wakes and funerals. In addition to both questionnaires and face-to-face discussions, the use of ICT helped strengthen the transmission of information amongst parishioners and those outside the group.

Key Words Buddhist temples, Indoctrination activities, multi-denominational, annual events, Dharma talks